粟島における伝統・文化に対する子どもの「思い」の実態

―内浦神楽と釜谷獅子舞に関する質問紙調査を通して―

早瀬　博典

Ⅰ．はじめに

『小学校学習指導要領解説（平成 29 年告示）社会編』（以下，解説社会編）では，改訂の基本方針として「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の育成が掲げられている。この方針は，社会科における伝統・文化の取扱いと関わっている。具体的には，解説社会編の小学校 4 年生の目標に，次のような記述がみられる。「知識・技能」では，伝統・文化を人々の生活との関連を踏まえて理解すること。「思考力・判断力・表現力等」では，文化財や年中行事に込められた願いや努力，先人の働きを考える力を養うこと。「学びに向かう力・人間性等」では，伝統・文化の保護・継承のために努力し協力する意識を養うこと，である。

このうち，「学びに向かう力・人間性等」と伝統・文化の関係に注目すると，伝統・文化の保護や継承のため，協同して社会に参加することが求められていると解釈できる。関連して大友（2014）は，これからの時代の子どもたちに必要なのは，国や社会に主体的に参加する意欲や態度であるとする。そして，そうした意欲や態度を育成する起点となるのは，帰属する社会の伝統・文化に対する子どもの「思い」であると主張している。「思い」とは認知と情動の二つを指し，社会に参加するための基礎として捉えることができる[1)]。このことを踏まえれば，伝統・文化を社会科で取り扱うにあたっては，伝統・文化への子どもの「思い」に焦点を当てることが重要と考えられる。

では，子どもは自分が生活する社会の伝統・文化について，どのような「思い」を持っているのだろうか。大谷ほか（2006）は小学校 4 年生を対象に，伝統・文化の「青森ねぶた」と「弘前ねぷた」への意識調査を行っている。そこでは，子どもは伝統・文化の継承について肯定的な意識を持つ一方で，伝統・文化に関わることに積極的でないことが明らかになった。この調査は，伝統・文化に対する子どもの意識の一端が明らかになった点で重要である。ただし質問項目が全て選択式であり，子どもの意識の背景となる「思い」については明らかにされていない。また，加藤（2005）は中学

生と高校生を対象とした伝統・文化に対する意識調査を行っているが，質問項目は同じく選択式のみであり，「思い」の実態は不明瞭である。坪田（2010）も伝統・文化の背景に人々の「思い」があることに触れているが，子どもの「思い」を分析対象にはしていない。井田（2012）はミクロネシア連邦の子どもが伝統・文化を如何に捉えているのかを明らかにしており，「思い」の中でも認知に焦点付いた研究として意義深い。一方で情動には注目されていないため，さらなる研究が求められる。

そこで本研究では，子どもの「思い」を認知と情動の二つの視点から明らかにすることを念頭に，新潟県岩船郡粟島の伝統・文化に目を向ける。粟島は内浦と釜谷の二つの集落を擁し，それぞれが独自の文化を残存させている。中でも内浦の「内浦神楽」と釜谷の「釜谷獅子舞」は，二つの集落の名前を冠した伝統・文化である。神楽や獅子舞は伝統・文化の中でも，地域の教育力と関連が深い（槇石，2004）ため，研究対象として示唆に富むと考える。釜谷獅子舞については，早瀬（2017）が粟島の小学生と中学生を対象とした意識調査を行っている。しかし，そこでは内浦神楽は対象とされず，子どもの「思い」への注目もなされていない。先行研究の課題である子どもの「思い」を看取るためには，選択式の問いに加えて記述式の問いを活用することや，二つの伝統・文化に対する記述内容の比較を通して，子どもの「思い」の実態をより明確にすることが求められよう[2)]。

以上より本研究の目的は，粟島における伝統・文化に対する子どもの「思い」の実態について，内浦神楽と釜谷獅子舞に関する質問紙調査を通して明らかにすることである。研究目的を達成するために，次の手続きを取る。第一に，先行研究から，社会科における伝統・文化の位置づけと「思い」に注目する意義を明らかにする（第Ⅱ章）。第二に，粟島での調査で得た資料から，内浦集落と釜谷集落の民俗の特徴を明らかにする。その上で内浦神楽と釜谷獅子舞を比較し，粟島の伝統・文化の特徴を明らかにする（第Ⅲ章）。第三に，内浦神楽と釜谷獅子舞に関する質問紙調査から，粟島における子どもの伝統・文化に対する「思い」の実態について明らかにする（第Ⅳ章）。最後に，明らかになったことから本研究の成果と課題を示す（第Ⅴ章）。

Ⅱ．社会科における伝統・文化の位置づけと「思い」に注目する意義

１．社会科における伝統・文化の位置づけの変遷

伝統・文化は伝統，文化，あるいは伝統や文化といった表記がなされ，社会科で取り扱われている。以下では『小学校学習指導要領　社会編』（以下，指導要領）における伝統・文化の位置づけの変遷[3)]を明らかにした上で，本稿で伝統・文化の「思い」に注目する意義を明確にする。

試案として施行された 1951 年版の指導要領では，文化は生産や交通，政治などと並列する社会機能として位置づけられていた。そこでは，文化の生活上の意味を理解す

ることを通して，社会的な協同活動に参加する態度や能力を養うことが目指された。すなわち，社会科では成立当初から，文化の学びが社会参加を見越した態度や能力と結びついていたといえるだろう。

1958 年版指導要領では第 6 学年の目標に，文化や伝統に対する正しい理解と尊重する態度を深め，進んで世界の平和や人類の福祉に貢献する，といった記述がみられる。ここでは，伝統・文化の理解を通じて利他的態度を育むことが目指されたといえよう。

続いて 1968 年版指導要領では，全体の目標として伝統・文化は「歴史的に形成されてきたもの」という理解を前提に，「歴史や伝統に対する理解と愛情」を深め，「国家や社会の発展に尽くそうとする態度を育てる」ことが目指された。1958 年版に引き続いて，知識と態度に関連していたといえる。また，第 6 学年の歴史において，江戸時代の文化を学ぶことや，日本と諸外国の文化交流を学ぶという記述がみられる。伝統・文化の学習の目標に即した内容が，歴史学習に位置づけられたといえよう。

1977 年版指導要領では，第 3 学年の内容として，「地域社会の文化財や行事に関心をもたせる」ことが位置づけられた。また，第 6 学年の目標に「文化遺産についての関心と理解」を深めること，および「我が国の歴史や伝統を大切にしようとする態度を育てる」ことが位置づけられた。後者は 1968 年版に引き続いて，知識理解と態度の双方を重視していることが窺える。前者は地域学習の入り口としての内容であり，文化を生活と関連付けて学ぶことが念頭に置かれている。

1989 年版指導要領は，第 3 学年の内容として「地域の文化財や年中行事に関心をもち，人々の願いについて考えることができるようにする」ことが位置づいている。人々の願いと文化の結び付きが強調されている。また，第 4 学年では「地域の文化や開発などに尽くした先人」の努力について学ぶことが内容として位置づけられた。過去から今につながる人々の努力を理解するための題材として，伝統・文化が用いられていたことがわかる。第 6 学年については「文化遺産」についての理解に加えて，「歴史や伝統を大切にする心情を育てる」ことが明記された。知識理解だけではなく，考える力を身に付けることや，態度や心までを射程としていることが窺える。

1998 年版指導要領では，第 3 学年および第 4 学年の内容として「地域に残る文化財や年中行事」が挙げられている。第 6 学年の目標には，文化遺産についての理解と，伝統を大切にする心情が引き続き記述されている。第 6 学年の内容には，歴史的事象について文化財を活用して調べることや，日本の文化を歴史的に学ぶことなどが位置づけられている。加えて，「外国の人々と共に生きていくためには異なる文化や習慣を理解し合うことが大切」といった，海外との交流を意識した内容もみられる。

2008 年版指導要領では，第 3 学年および第 4 学年の内容として，引き続き文化財や年中行事が明記され，また，「地域の発展に尽くした先人の具体的事例」として，自然環境と並列した「伝統や文化」という記述がみられる。第 6 学年では目標に「文化遺

産について興味・関心と理解を深める」とともに，「伝統を大切にし，国を愛する心情を育てる」といった表記がみられる。また，内容には 1999 年版から引き続いて，文化遺産についての調べ学習や，日本の文化の起源についての調査，異なる文化の理解といったことが盛り込まれている。内容の取扱いでは，我が国や諸外国の伝統や文化を尊重しようとする態度を養う」ことが記述されており，態度形成と結びついていることが改めて確認できる。

2017 年に告示された指導要領では，全体の目標として「地域や我が国の歴史や伝統と文化を通して社会生活について理解する」ことが明記されている。続いて第 4 学年の目標では，「地域の伝統と文化や地域の発展に尽くした先人の働き」について，生活との関連から理解し，必要な情報をまとめる技能を身に付けると明記されている。また，「地域社会の一員としての自覚を養う」という表記は，伝統・文化の保護や継承を実現するための努力や協力といった，「学びに向かう力・人間性等」と関連した項目である。さらに，内容として，「県内の伝統や文化，先人の働き」に基づく学習問題の解決と追究を通して，人々の願いや先人の苦心といった「知識・技能」，文化財や年中行事の様子から人々の願いや努力を考え，表現するといった「思考力，判断力，表現力等」の育成が目指される。

以上から，指導要領では伝統・文化が，知識や考える力，態度と結びつきながら位置づけられてきたことがわかる。そして現在では，「知識・技能」，「思考力・判断力・表現力等」，「学びに向かう力・人間性等」といった，資質・能力の育成と関わった取り扱いが目指されているといえよう。

２．伝統・文化への「思い」の重要性

大友（2014）は，社会科における伝統・文化を「公共」と接続して捉え，「公共的な事項に自ら参画していく資質や能力」の育成との関わりから論じている。大友の整理によれば，伝統・文化の教育には，日本人としてのアイデンティティと国際性を育み，公共の精神と規範意識を再構築するというねらいがある。そして，新学習指導要領で重視されるのは公共的な事項に主体的に参加する意識や態度であり，その涵養にあたって，伝統・文化への理解と愛着が求められている。さらに大友は，公共を意識した意欲や態度を育成する起点が，子ども一人一人の個性的な「思い」であると述べる。ここでいう「思い」は，伝統・文化に対する認知と情動に近しいものとして論じられており，意欲や態度の根底にあるものとして捉えることができる。

以上をまとめると，これからの社会科における伝統・文化の取り扱いを考える上で，公共に参加するという視点が重要な要素となる。そして，とりわけ資質・能力や態度と関わる学習の鍵として，伝統・文化への子どもの「思い」に注目する必要がある。このことを踏まえ，先行研究で不足していた伝統・文化への子どもの「思い」の実態を明らかにするために，粟島の伝統・文化である内浦神楽と釜谷獅子舞に注目する。

Ⅲ．粟島における伝統・文化の特徴

１．粟島の概要と先行研究

粟島は新潟県の北方の離島である。新潟県村上市の岩船港から約 35km 離れた場所に位置する。周囲約 23km，東西 4.4km，南北 6.1km，面積は 9.78km^2 で，最高標高は島の中央にある小柴山の 265.3m，人口は 363 人である（環境省，2015）。小柴山を挟んで西の海岸には釜谷集落，東の海岸には内浦集落がある。

粟島には本土の人間が入植する以前から，蝦夷と関係した先住民が生活していたとされる（環境省，2015）。粟島の島名は 808 年には粟生蝦夷であったことや，地名にアイヌ語に由来するものがみられる（早瀬，2017）ことが，この説を裏付けている。こうした先住民の住む粟島に，8 世紀から 9 世紀の中ごろ，本土の人々が漂着した。流れ着いた人々と先住民が協力して，848 年前後には釜谷集落と内浦集落の原型がつくられた（環境省，2015）。

粟島は幕末期に北前船の重要な避難港とされ[4)]，船を介した海上交通によって文化交流がなされていた。海上交通の特徴として，本土と蝦夷を結んでいたことが挙げられる。幕府は本土から米や酒などを蝦夷に輸出し，蝦夷からは鮭，数の子などを輸入していた（伴田，1983）。粟島は，こうした交易の中継基地の役割を担っていたのである。現在では 1990 年より普通船「フェリーあわしま」が，2011 年より高速船「awaline きらら」がそれぞれ運航し，粟島と岩船港を繋いでいる。

粟島については，民俗学では古くから研究がなされてきた。島内の集落の特徴に言及した研究（北見，1973）や，宗教に関する研究（吉田，1985）がみられる。しかし，こうした研究では，内浦神楽と釜谷獅子舞という伝統・文化は見過ごされていた。そこで以下では，粟島の伝統・文化が如何なるものかを把握するために，内浦神楽と釜谷獅子舞の特徴を明らかにする。その際，二つの集落における伝統・文化の背景として，集落が擁する民俗に注目したい。それは，福田（1984）や藤岡（2001）が指摘するように，民俗が伝統・文化と密接な関わりを持つ事象といえるからである[5)]。

２．神楽と獅子舞の違いと民俗とのつながり

内浦神楽と釜谷獅子舞は，その名称が表すように，粟島の内浦集落と釜谷集落それぞれの伝統・文化である。この二つの伝統・文化を本稿で取り扱うにあたって，「神楽」と「獅子舞」の違いに触れる。

神楽という言葉は，「神座（かむくら）」が「かんぐら」，「かぐら」と変化して生まれたとする説がある[6)]。その起源は江戸時代の神社信仰であり，神官や神楽師によって広められたとされる。神楽を舞う目的は，神を座に迎えて祈祷を行うことで，長寿や豊作を祈ったり災難を回避することである。吉川（1995）によれば，神楽は伝統・文化として北海道から鹿児島県まで広く分布しており，「共同体のもっとも重要な祭りとして行われている」とする。また，民俗舞踊の一種としての神楽は複雑な動作の舞

踊を含み，信仰と関係した「神が人にのりうつる」神がかりをする点に特徴があるとされる。

他方で，獅子舞は神楽と異なる背景を擁している。森田（2015）によれば，612 年に中国から伝来した唐獅子の舞がその起源である。そこでの獅子舞は，舞場の邪気を祓う舞として演じられ，西日本に広く伝播していったとする。

こうした神楽や獅子舞について，民俗学では多くの論文がみられる。笹原（2014）は，獅子舞や神楽は「祭祀芸能」として研究されてきたことを指摘し，信仰や神事，祭りと不可分と論じている。こうした理解は，西角井（1979）が神楽と獅子舞を，祭りなどの生活経験と結びつく民俗として位置づけたところにもみられる。

以上から神楽や獅子舞は，共同体の祭りや信仰といった民俗と密接に結びついていることがわかる。したがって，内浦集落と釜谷集落の民俗に注目することにより，内浦神楽と釜谷獅子舞の背景に光を当てることができると考えられる。そこで次に，内浦集落と釜谷集落の民俗について明らかにしたい。

３．内浦集落と釜谷集落の民俗の比較

内浦集落は小柴山から東にあり，粟島の東海岸に位置している。マツラ（現在の松浦）の一族や，ホンボ（現在の本保）の一族が最初に上陸した場所である（環境省，2015）。現在では本保，脇川といった姓がみられる。治郎作や平三郎のような屋号という家の呼び名があり，民宿の名称となっている。正月には，家の玄関に松を飾る習慣がある。

内浦集落の信仰の中心は，八所神社である。大和朝廷の流れをくむ神々を祭っている（山田，2007）。八所神社の本殿は，集落内の田んぼや家々に挟まれた平地にある（写真１）。八所神社で神主を務める人物への聞き取り調査によれば，信仰は祭りの際の祝詞などに影響を与えているとする。例えば，8 月に行われる「宵宮祭り」と，9 月の「本祭り」の祝詞は，八所神社の神主が信仰にもとづいて読み上げる。葬制は火葬で，墓は集落の南の一ヶ所である。墓場は木々に囲まれ，石塔型以外に丸石を積んだ形の墓がみられる（写真２）。集落内の区分けとして 9 つ以上の複数の組が存在するが，葬制との関係は無い。

他方で，釜谷集落は小柴山から西にあり，粟島の西海岸に位置する。元々内浦に住んでいたエミシとマツラの移住によって集落が形成された（伴田，1983）。現在では松浦や渡辺といった姓がみられる。屋号には，源左衛門や彦左衛門などがあり，正月には椿を飾る習慣がある。集落は切り立った斜面に沿って家々や神社が立ち並び，中心部分から西と東で上（かみ）組と下（しも）組に分かれている。上組，下組は冠婚葬祭の際にグループとなり，墓穴掘りのような作業を協力して行う。釜谷では上組や下組，あるいは集落全体で行事に参加することを「人足（じんそく）」と呼び，集落の連帯を大切にしている。

写真１　八所神社（2018 年 7 月 7 日　筆者撮影）

写真２　内浦の墓（2018 年 7 月 7 日　筆者撮影）

写真３　六所神社（2018 年 7 月 7 日　筆者撮影）

写真４　釜谷東の墓（2018 年 7 月 7 日　筆者撮影）

釜谷集落の信仰は，六所神社が中心となる。その源流は宮城県の塩竈（しおがま）市にあり，正式名称は塩釜六所神社である。集落内の山道を登った先に本殿がある（写真３）。粟島観光協会職員の方への聞き取り調査によれば，釜谷集落では 2002 年まで土葬が行われており，風呂桶型，樽型，湯つぼ型，立方体型といった様々な形の棺桶が用いられたとされる。墓穴は釜谷集落の人々によって協力して掘られる。墓の位置は集落の東と西の二ヶ所に分散しており，先述した上組は西側の墓，下組は東側の墓を使用することが定められている（写真４）。また，釜谷集落の葬制は両墓制である[7)]。両墓制とは，遺体の埋葬地と墓参りの墓地を分けることを指す日本の墓制民俗の一つである。両墓制は釜谷集落の民俗を特徴づけるとともに，祭事や厄払いを重要視する姿勢を示しており，釜谷獅子舞が厄払いの伝統・文化として継続されてきた背景を成していると考えられる。

以上の内浦集落と釜谷集落の民俗についてまとめたものが第１表である。

第１表　内浦集落と釜谷集落の民俗

	内浦集落	釜谷集落
正月	松を１月６日まで飾る	椿を１月７日まで飾る
姓名	本保，脇川，五十嵐，前田など	松浦，渡辺など
屋号	三吉，弥助，じんきち，みなとや，弥三郎，脇源，六郎兵衛，与平，見はらし，治郎作，かね重，たてしま，ますや，なおや，みやこや	松太屋，渡佐，鈴木屋，市左ェ門，大滝，源左ェ門，金三郎，亀屋，後藤，小萩，又次郎
葬制	墓の位置は一ヶ所 墓の形は石塔型の他に丸石型がみられる	2002 年まで土葬がなされていた 墓の位置が集落の東西の二ヶ所であり，両墓制である
信仰	八所神社が信仰の中心であり，祭りなどに関わっている 本殿は平地にある	六所神社が信仰の中心である 本殿は山道を上った先にある
組み分け	9 つ以上の組が存在する 葬制との関わりはない	集落の西東で上組と下組に分かれる 集落全体で行事等に参加する「人足」という伝統がある

（粟島での聞き取り調査をもとに筆者作成）

第１表からは，内浦集落と釜谷集落が，様々な面で異なる独自の民俗を有していることがわかる。内浦神楽と釜谷獅子舞も例外ではなく，多くの似て非なる特徴を持っている。次に，内浦神楽と釜谷獅子舞の特徴について明らかにする。

４．粟島における二つの伝統・文化の特徴

まず，内浦神楽会会長への聞き取り調査から，内浦神楽の特徴について明らかにしていく。内浦神楽は新潟県稲荷丘より，７人の移住者とともに伝来したとされる。推進団体である内浦神楽会は，1984 年 12 月に内浦集落が予算を出資して発足した。2017 年には総数 20 人で活動している。近年では島外からの移住者や，粟島浦村立小・中学校の教員を会員とするなど，外部に開いていく運営がなされている。

内浦神楽では，唐草模様・油丹柄の衣装と獅子頭（写真５）が用いられる。その他に笛が一つ，大太鼓が一つ，小太鼓が二つと太鼓を設置する社殿が設けられる。内浦神楽は，笛と太鼓によって奏でられる音楽に合わせて，獅子頭をつけた踊りが行われるという一連の流れを内容としている。

内浦神楽は，9 月・10 月の村民運動会やお祭り，演芸会，磯タコ捕りツアー，演芸会といったイベントで披露される。こうした行事は秋から冬に行われる。つまり，内浦神楽は春や夏には行われない。これは，恒常的に内浦神楽を披露するには会員数が不足しているためである。とりわけ獅子頭と太鼓を担える人材の減少が問題視されている。こうした状況から，内浦神楽は後継者の不足を課題とすることが窺える。近年

では国土交通省によるアイランダー[8]という催しに参加し，2015 年から 2017 年にかけて島外の人々に披露されている。内浦神楽会には，島外への発信に積極的な姿勢がみられる。

次に，釜谷獅子舞保存会会長への聞き取り調査をもとに，釜谷獅子舞の特徴について明らかにする。釜谷獅子舞は，釜谷集落の渡辺源次郎によって，1863 年に北海道松前より伝来したとされる。先述のように粟島と蝦夷には古くから関わりがあり，釜谷獅子舞もそういった関わりの中で粟島に伝わってきたものと考えられる。その後一度断絶し，1977 年に現在の形で復興したとされる。復興当初の釜谷獅子舞には，釜谷地区の家々全てから人々が参加していた。こうした集落全員で参加する伝統は，先述した釜谷集落の民俗である「人足」が基盤にあると考えられる。2017 年の釜谷獅子舞保存会には，12 名が所属している。活動資金は，2003 年より教育委員会から出資されている補助金が主である。入会の規則が厳しく，内浦神楽と同様に後継者の不足は課題とされている。

釜谷獅子舞の内容は，次の二部構成である。第一部では，太鼓の担当者が歌う「御獅子舞謡」に合わせ，獅子頭（写真６）を被った踊り手が悪魔祓いの舞を踊る。第二部では，会員全体で祝い唄の「さっこい」と「さんさがり」を唄い，1 年の幸運を祈願する。釜谷獅子舞は，1977 年の復興時には 1 月の「乗りそめ」や 2 月の「漁神楽」といった，漁業に関する祭礼に合わせて披露されていた。その際は，釜谷獅子舞保存会の会員が，釜谷地区の家々で釜谷獅子舞を舞っていたとされる。現在は会員数の減少に伴い，12 月に日程と場所が決定され，翌年の 1 月に行われている。

2011 年と 2017 年にはアイランダー2011，2017 に参加し，粟島の伝統・文化として本土の人々に向けて発表がなされている。ただし，釜谷獅子舞保存会では，釜谷獅子舞を観光資源とすることに主眼は置いておらず，釜谷集落の伝統・文化として残していくことが第一であるとする。

以上の内浦神楽と釜谷獅子舞の特徴をまとめたものが，第２表である。

写真５　内浦神楽（2018 年 7 月 7 日　筆者撮影）

写真６　釜谷獅子舞（2018 年 7 月 7 日　筆者撮影）

第２表　内浦神楽と釜谷獅子舞の特徴

	内浦神楽	釜谷獅子舞
起源	新潟県稲荷丘	北海道松前
位置づけ	お祭りなどの催しもの	厄払い，漁業の無事を祈願
発表場所	主としてイベント会場	主として釜谷集落の家々
内容	笛と太鼓によって奏でられる音楽に合わせて，獅子頭を被った踊り手による踊りが披露される	太鼓の音と太鼓の担当者が唄う「御獅子舞謡」に合わせ，獅子頭を被った踊り手による悪魔祓いの舞が披露される。その後「さっこい」と「さんさがり」が唄われる
使用楽器等	獅子頭，小太鼓二つ，大太鼓一つ，笛，社殿	獅子頭，太鼓二個
団体名	内浦神楽会（20 名）	釜谷獅子舞保存会（12 名）
予算出資者	内浦集落	教育委員会
島外での活動状況	アイランダー2015，2016，2017	アイランダー2011，2017
使用曲	内浦神楽の伝統音楽	御獅子舞謡，さっこい，さんさがり

（粟島での聞き取り調査をもとに筆者作成）

内浦神楽と釜谷獅子舞の特徴には，次のような共通点がみられる。第一に，共に起源を島外に持ち，船を介した交流によって流入した伝統・文化であること。第二に，太鼓や獅子頭，歌を用いること。第三に，それぞれの集落に推進する団体が存在しており，近年では島外のイベントにも参加していること，である。

一方で，次のような差異もみられる。第一に，位置づけの違いである。内浦神楽は島内のお祭り等で披露される催し物である。対して釜谷獅子舞は厄払いを主たる目的としている。この差異には，祭りとの結び付きが強い神楽と，邪気払いの役割を持った獅子舞の，それぞれの性質が関わっているように思われる。第二に，会員数の違いである。団体の会員数は内浦神楽会の方が多く，釜谷獅子舞保存会の方が少ない。このことには，位置づけの違いや披露される機会の違いが影響していると考えられる。

ここまで，内浦神楽と釜谷獅子舞が如何なる特徴を持つ伝統・文化であるかを論じてきた。こうした伝統・文化について，粟島の子ども達はどのような「思い」を抱いているのだろうか。このことを，選択式と記述式の項目を設けた質問紙調査によって明らかにしたい。

Ⅳ．粟島における伝統・文化に対する子どもの意識と「思い」の実態

１．質問紙調査の概要

質問項目は，次の 12 問を設定した。調査対象者の属性を調査する選択式の設問 3

つ，内浦神楽に対する意識を調査する選択式の設問 4 つ，内浦神楽と釜谷獅子舞に対する意識を調査する選択式の設問 3 つ，内浦神楽と釜谷獅子舞に対する「思い」を記述する設問 2 つである。調査対象者は，粟島浦村立粟島浦小学校・中学校に通う児童 12 名生徒 15 名の，合計 27 名である。26 人分の有効な回答を得ることができた。

２．選択式の問いにおける調査結果の分析

以下では，調査対象者の基本属性の調査結果について考察を行う。その上で，選択式の設問の調査結果を示し，結果の考察を行う。

第３表　質問紙調査対象者の基本属性

学年	小 1		小 2		小 3		小 4		小 5		小 6		中 1		中 2		中 3		計
性別	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
島内	2			1		1	1			1					1			1	8
島外			1			2		1	1	1			4	3	2	1	1	1	18
合計	2		2		3		2		3				7		4		3		26

第３表は基本属性を問う設問の結果をまとめたものである。現在は小学校 6 年生の児童が通学していないことや，小学生，中学生共に島内出身者よりも島外出身者の人数が多いことを確認できる。児童・生徒の総数は 26 人であり，約三分の二にあたる 18 人が島外出身者,残り約三分の一にあたる 8 人が島内出身者である。このことから，島外からの留学生受け入れが進んでいることや，島内での少子化が進行していることを窺い知ることができる。

第４表　内浦神楽・釜谷獅子舞への参加意識

項目＼学年	小 1	小 2	小 3	小 4	小 5	中 1	中 2	中 3	計
参加している	2	2		1	2	3	2	1	13
参加したくないが，参加している				1					1
参加したいが，参加していない			2		1	1			4
参加したくないので，参加していない								1	1
その他			1			3	1	1	6

第４表からは，小学生９人中７名，中学生 13 人中６名が，何らかの形で参加をしていることが確認できる。その他に，「参加したいが，参加していない」という選択肢を選んだ児童・生徒が４名みられる。内浦神楽や釜谷獅子舞について認知しており，参加への意欲があるにもかかわらず，参加ができない状況にあることが窺われる。「その他」に関しては，「留学生であるため」，あるいは「よく知らない」といった回答がみられた。参加ができない理由を記述する傾向にあったといえる。なお，中学校２年生１名が無回答であったため，この設問に限っては集計できた合計人数が 25 名である。

第５表　内浦神楽・釜谷獅子舞の伝承と保存についての意識

項目＼学年	小１	小２	小３	小４	小５	中１	中２	中３	計
そう思う	1	2	2	1	1	4	3	1	15
ややそう思う	1		1	1	1		1	2	7
あまり思わない									
思わない									
その他					1	3			4

第５表からは，小学生が 12 人中 11 人，中学生が 14 人中 11 人に「そう思う」または「ややそう思う」という，保存と継承に肯定的な回答がみられた。また，「あまり思わない」，「思わない」といった否定的な回答がみられない点が特徴的であった。

第６表　内浦神楽・釜谷獅子舞を通した島民としての自覚

項目＼学年	小１	小２	小３	小４	小５	中１	中２	中３	計
感じる	2	2	1	1		3	1	1	11
少し感じる			1		2		2		6
あまり感じない				1				2	3
感じない			1						1
その他					1	4	1		6

第６表からは，小学生 12 人中９人，中学生 14 人中７人に「感じる」あるいは「少し感じる」といった肯定的な回答がみられた。

選択式の問いの分析により，内浦神楽と釜谷獅子舞の何れかに参加している人数や，内浦神楽と釜谷獅子舞を残していきたいと思っている人数，そして内浦神楽と釜谷獅子舞を通して，粟島の人という自覚を感じている人数が明らかとなった。調査結果より，粟島浦村立粟島浦小・中学校に通う子どもたちは，粟島の伝統・文化への参加や保存に対して肯定的な意識を持っていることが明らかとなった。

一方で，上記の意識の根底にあると思われる，内浦神楽と釜谷獅子舞に対する「思

い」については，ここまでの選択式の質問紙調査では十分には見えてこない。そこで次に，記述式の問いについての調査結果の分析を試みる。

３．内浦神楽と釜谷獅子舞に対する記述内容の分析

質問紙調査では,「あなたにとっての内浦神楽を, 言葉やイラストで表してください」と,「粟島には，内浦神楽と，もう一つの獅子舞である，釜谷獅子舞があります。二つの獅子舞について，知っていることをかいてください」という二つの設問で，児童・生徒に記述を求めた。

内浦神楽に対する記述からは，次のことがわかる。まず，小学生による「かっこいい」「ししまい」，中学生の「かっこいい，みてて楽しいもの」,「1 年の楽しみ，心の休みどき」,「楽しそうなイベントみたいなもの」といった，内浦神楽のイメージに喚起された情動としての「思い」がみられる。また,「人が集まる行事」や「でんとう」といった，内浦神楽の認知としての「思い」がみられる。さらに,「粟島の伝統を残していくための大事なもの」という「思い」は，内浦神楽の伝承と保存についての意識の背景となる「思い」といえる。

一方で，内浦神楽と釜谷獅子舞の違いの記述には空欄が目立った。中学生の「わからない」「しらない」といった記述では，内浦神楽と釜谷獅子舞の違いについて，子どもは意識していないように思われる。ただし，中学生の「家を回って獅子舞をおどる」という記述は釜谷獅子舞についての認知を表しており,「踊りが異なる」ことに触れた記述は二つの獅子舞の違いを表現している。

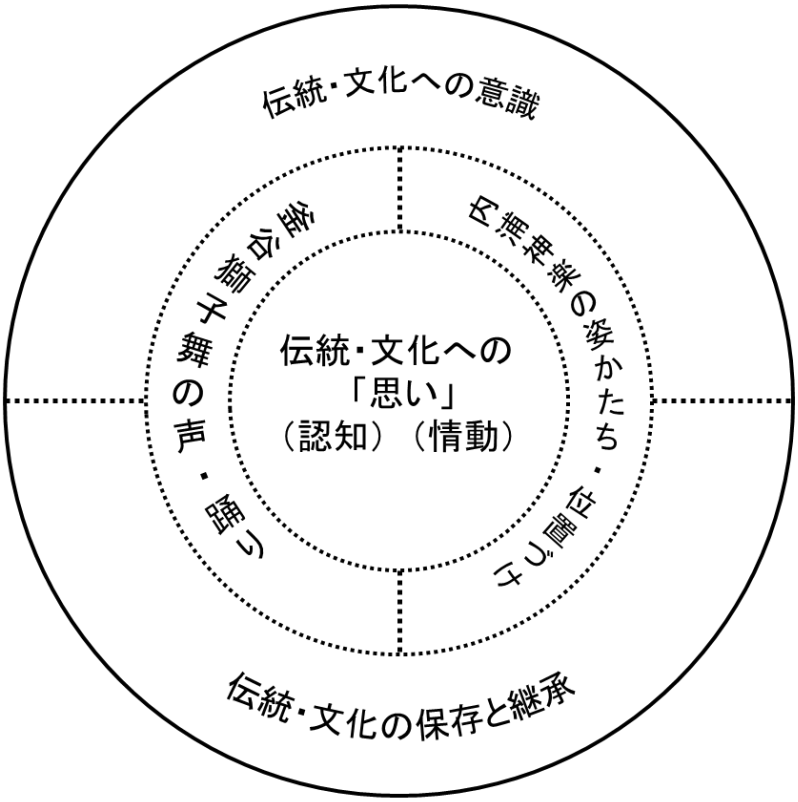
第７表　内浦神楽と釜谷獅子舞に関する記述内容

	内浦神楽に対する記述	内浦神楽と釜谷獅子舞の違いの記述
小学生	かっこいい とてもいきられる ししまい 人が集まる行事 でんとう	声の大きさ
中学生	わからない 知らない 1 年の楽しみ，心の休みどき お祭？ 楽しそうなイベントみたいなもの 楽しくておもしろい かっこいい，みてて楽しいもの 粟島の伝統を残していくための大事なもの	家を回って獅子舞をおどる わからない どちらもわからない しらない 踊りが異なる

４．子どもの伝統・文化に対する「思い」の実態と意識の関係

先に述べたように，内浦神楽と釜谷獅子舞への子どもの「思い」には，姿かたちや位置づけから喚起される情動と，声や踊りに対する認知の二つが確認できた。Damasio（1999）に基づけば，こうした「思い」は，選択式の問いで明らかにした意識の根底に位置づくと考えられる。「伝統を残していくための大事なもの」という記述も，選択式の問いの結果との繋がりを示唆するものである。これらを踏まえれば，粟島における子どもの伝統・文化への「思い」は，伝統・文化の保存・継承に関する意識の核として捉えられよう。

以上から，子どもの伝統・文化への「思い」と意識の関係は，次の第１図のように表すことができる。ただし，子どもの内浦神楽と釜谷獅子舞の違いについての理解は曖昧である。さらに，伝統・文化の保存と継承に関する意識は伝統・文化への意識の全てではなく，その一端であると考えられる。第１図の点線部は，これらを表現している。



第１図　粟島における子どもの伝統・文化に対する「思い」の実態と意識の関係

Ⅴ．おわりに

本研究の目的は，粟島における子どもの伝統・文化に対する「思い」の実態を明らかにすることであった。目的を達成するための方法として，内浦神楽と釜谷獅子舞に関する質問紙調査を行った。その成果と課題を以下に述べる。

粟島の伝統・文化に対する子どもの「思い」の実態として，内浦神楽の姿かたちや位置づけについての情動と，内浦神楽と釜谷獅子舞の踊りや声の違いに対する認知が確認できた。また，「思い」の中には，内浦神楽と釜谷獅子舞の保存と継承に関する意識と結びつくものがみられる。このことは，子どもの伝統・文化に対する「思い」と意識が関係していることを示唆するものである。

一方で今回の調査では，内浦神楽と釜谷獅子舞の違いに関する子どもの意識や「思い」を看取る記述を十分に得ることができなかった。また，「思い」と意識の関係が示唆されたものの，どのような関係かは明瞭ではない。今後の研究では，「思い」と意識の関係をより鮮明にすることが求められよう。そのためには，児童・生徒への聞き取り調査を行うことや，質問紙の形式を再考することが必要である。今後の課題としたい。

謝辞

本論文の執筆にあたり，筑波大学の井田仁康先生，國分麻里先生のお二方から，大変丁寧なご指導をいただきました。また，筑波大学大学院の先輩や同期，後輩の皆様方からは，貴重なご指摘をいただきました。そして，粟島観光協会の皆様，内浦神楽会の皆様，釜谷獅子舞保存会の皆様，八所神社関係者の皆様，民宿「治郎作」の皆様，民宿「松太屋」の皆様，粟島浦村立粟島浦小・中学校の教員および児童・生徒の皆様，粟島浦村役場の皆様，粟島浦村資料館の皆様をはじめ，多くの方々に大変お世話になりました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

注

1）大友（2014）は伝統・文化に対する「思い」について，理解と愛着という二つの側面から論じている。本稿では理解を認知，愛着を情動として解釈し，「思い」を認知と情動から成るものとして取り扱う。

2）Damasio（1999）によれば，意識や感情には情動が深く関わっており，その核に成り得るとする。さらに有光（2002）は，自由記述式の質問紙調査を情動経験のような「思い」の調査に用いることができるとする。本研究ではこうした先行研究を参考に，子どもの意識の根底にある「思い」を自由記述によって明らかにできるものと考える。

3）指導要領の調査にあたって，以下の「学習指導要領データベース」を参考にした。

https://www.nier.go.jp/guideline/（2018年8月1日）

4）粟島が避難港としての役割を担っていたことは，北見（1973）や山田（2007）で確認できる。

5）福田（1984）は，民俗を「一定領域を占取して超世代的に存続する，社会集団が規制力を持ってその構成員に担わせることで伝承されている事象」と定義する。藤岡（2001）はこの定義をもとに，祭りや信仰を含めた伝統・文化と民俗を接近させ，「生活の型」と表現している。以上の先行研究から，伝統・文化と民俗は密接な関係にあるものと捉えることができる。

6）神楽の起源については，以下の「神楽　その起源と歴史」を参考にした。
http://www.tohoku21.net/kagura/history/kigen.html（2018年8月1日）

7）釜谷集落の葬制は両墓制である。両墓制とは，遺体の埋葬地と墓参りの墓地を分ける日本の墓制民俗の一つである。遺体の埋葬地を埋め墓，墓参りのための墓地を詣り墓とする。民俗学における葬制研究をまとめた山田（2011）によれば，両墓制の定義は1936年の大間知篤三による「両墓制の資料」が初出であり，さらにその源流は，柳田國男が1929年に「墓制の沿革に就いて」の中で「葬地」と「祭地」としたことであるとする。写真4では石の墓が詣り墓であり，埋め墓はその間の草に覆われた土地となる。両墓制のような葬制は，集落の民俗を特徴づける要素の一つといえる。

8）アイランダーについては，以下の「全国の島々が集まる祭典　アイランダー2018」を参考にした。
http://www.i-lander.com/（2018年8月1日）

文献

有光興記（2002）：質問紙法による感情研究．感情心理学研究，**9**(1)，pp.23-30.

井田仁康（2012）：ミクロネシア連邦における地域の特色と学校教育の関わり―ヤップ州とチューク州を対象として―．井田仁康編著『地域と教育―地域における教育の魅力―』，学文社，pp.245-257.

大谷良光・立田健太・井上怜央（2006）：青森ねぶた・弘前ねぷたへの子どもの関わりと意識～青森市・弘前市内小学校4年生を対象とした調査～．弘前大学教育学部紀要，(96)，pp.51-60.

大友秀明（2014）：社会科教育における「文化学習」の意義と可能性．埼玉大学紀要．教育学部，**63**(1)，pp.253-266.

加藤友美子（2005）：伝統的な文化が子どもたちに果たす役割―広島県芸北地区における神楽と学校の関係から―．地域と教育，(4)，pp.49-68.

環境省（2015）：平成27年度エコツーリズム推進アドバイザー派遣事業事例集3-6粟

島観光協会（新潟県粟島浦村）.
https://www.env.go.jp/nature/ecotourism/try-ecotourism/env/chiiki_shien/haken/h27/report/pdf/3-6.pdf（2018 年 8 月 1 日）
北見俊夫（1973）:『日本海上交通史の研究』，鳴鳳社，856p.
笹原亮二（2014）: 17　民俗芸能と祭祀―中在家の花祭の現場を巡って―．国際常民文化研究叢書 7 －アジア祭祀芸能の比較研究－，(7)，pp. 369-382.
坪田益美（2010）：学校教育ならびに社会科における地域の伝統文化理解の重要性―高千穂神楽を事例として―．地域と教育，(9)，pp. 41-54.
伴田幸一郎編著（1983）:『あわしま風土記』，粟島浦村教育委員会，83p.
西角井正大（1979）:『民俗芸能入門』，文研出版，415p.
早瀬博典（2017）: 粟島における伝統・文化に対する子どもの意識 ―「釜谷獅子舞」についての質問紙調査を通して―．地域と教育，(16)，pp. 99-119.
福田アジオ（1984）：『日本民俗学方法序説―柳田国男と民俗学（日本民俗学研究叢書）』，弘文堂，389p.
藤岡和佳（2001）: 村落の歴史的環境保全施策．村落社会研究，7(2)，pp. 26-35.
槇石 多希子（2004）: 神楽と地域の教育力―福島県相馬郡福田十二神楽を事例にして―．仙台白百合女子大学紀要，8，pp. 63-72.
森田玲(2015):『日本の祭と神賑―京都・摂河泉の祭具から読み解く祈りのかたち―』，創元社，224p.
文部科学省（2018）：『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　社会編』，日本文教出版，217p.
山田慎也（2011）：山村調査、海村調査における葬制の位置づけとその目的．国立歴史民俗博物館研究報告，165，pp. 265-277.
山田浩久（2007）: 新潟県・粟島における特徴的な集落形態と産業構造．平岡昭利編著『離島研究Ⅲ』，海青社，pp. 181-194.
吉川周平(1995):神楽と舞踊―日本伝統舞踊研究の素材と方法をめぐって―．舞踊學，(17)，pp. 115-116.
吉田郁生（1985）:「粟島」の神様・仏さま．かみくひむし，58，pp. 1-11.
Damasio, R. A. (1999) : *Feeling of What Happens : Body and Emotion in the Making of Consciousness*, Mariner Books, 400p.